

国
(問題)
語

2017年度

〈2017 H29112024〉

注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は3、10ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意
 - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
 - (2) マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	●良い	○悪い	○悪い	○悪い
マークを消す時	○良い	○悪い	○悪い	○悪い

5 記述解答用紙記入上の注意

- (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
- (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。
- (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

(例)

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

番

- 6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 9 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

戸坂潤（一九〇〇年―一九四五年）は、官能によって、同時代をとらえる方法を知っている哲学者だった。同時代の波のあいだにあらわれる事件や人物を、歯ぎれよく次々に批評して、時代にたいして妥協するところがなかった。そして、そのゆえに、戦争下に政府にとらえられ、日本敗北の直前、獄死した。戸坂潤というと、彼を獄死においやった同時代への批評活動が思いだされるし、それがまちがっているわけではない。だが、そういう連想の中では、戸坂潤がその同時代の事件や人物をどのような仕方であらうと、どのような仕方であらうと批評したかという、批評の原理の一貫性が、背景におかれて、かすんでしまう。

¹ 戸坂潤の仕事において、もっとも注目すべきものは、批評の原理の一貫性なのだ。

大正・昭和の時代に日本で批評家として活動した人にとって、批評の原理の一貫性をたもつことがどれほど難かしいことだったか。年少の同時代人として戸坂の文章を読んだころとちがって、今では、そのことの重みが理解できる。

戸坂潤は、軍国主義時代に入ってから日本の同時代の思想を批評する仕事にうつる前に、批評の方法についての原理的考察に長い時間をついやした。その成果は『イデオロギーの論理学』（一九三〇年）、『イデオロギー概論』（一九三二年）に集められた。ここでは戸坂は、自分の批評の道具を裏にがっしりした形でつくりあげている。

日本の哲学・人文科学・社会科学は、欧米の学問の下うけのような資格をみずからにあたえて来た。そのための当然の結果の一つとして、日本の文科的学問の諸領域では、学者同士の議論は、自分の用語を自分で定義しながら話をすすめる習慣にとほしい。定義は、自分の学風の本店である欧米人の誰かの著書にまかすというややへりくだった態度がある。戸坂の論文集は、自分が批評において用いる主な用語を、みずから定義して話をすすめてゆく、学問として当然の道をとっており、戸坂の学風がソヴィエトあるいはドイツのどこかの本店にぞくする一支出でないことを明らかに示している。定義を自分でしてゆくという手続きを守るために、一つ一つの論文が長くわずらわしくなっている場合もある。しかし、戸坂のように官能をおして時代をとらえることのできた人が、まずはじめに、Aにたよらず、悟性にたよる仕方で、自分の考え方の基本用語を明らかにしておいたことが、戸坂の批評方法に、同時代におはれぬ性格をあたえた。

『イデオロギーの論理学』におさめられた「問題」に関する理論は、立場からはじめて考えをすすめてゆく型の思索の方法を批判する重要な論文である。ある立場からはじめてその立場を守ることには終始する思索の方法を公式主義と呼ぶとすれば、戸坂潤の思索の方法は、公式主義ではない。

もし仮に理論の性格がその有つ問題に於て理解される代わりに、それが立つと考えられる立場に於て理解されたならば、それから結果する代表的なるものは理論の原理的な水掛論でしかあり得ない。

普通に公式主義と呼ばれる思想は、かぎらずに続く水掛論にめぐらずに自分の立場に固執しつづける態度を言う。こういう態度にはある種の英雄的性格があり、そういうものとしての政治的価値はあるが、こういう態度の人々によってなされる議論は、実りないものとなることをはじめから約束されている。思想が自分個人のなかですすめられる内面対話であることを考えあわせれば、この公式主義は、不毛にたえる思想の型をうみだす。戸坂が自分の思想を公式主義と呼ばれることに甘んじたのは、彼がこれとは別の公式主義を自分のものとしていたからだ。

戸坂は、理論を理論たらしめるものは、その理論上の立場の整合ではなくして、その底にある問題把握にあると考える。まず問題を見出し、それを明確にし、それを解くために適切な理論上の立場を採用されるのだとかれは言う。

問題は、歴史によって、社会によって、あたえられる。しかし、できあいの問題を、つくられた形のまようけつぐというところからは、重大な思想はうまれない。

B 発見された問題が、ある立場から理論的に研究され解決された時に、その問題は、既成の問題として立場をとおしてうけつがれる。しかし、歴史の中に、社会の中に、新しく問題を見出すことは、立場をへないで問題に出会うことであり、この場合、立場は、問題の発見の後に、理論形成の途上でつくられる。

このように、立場をへない形での問題への直接の出会いの重視、立場よりも問題が優越するという指摘の中に、戸坂の公式主義が、普通に世におこなわれる公式主義をうちやぶる力をもつ公式主義として提起されたことがわかる。

戸坂は、問題を見出し、しっかりと設定するために、まず一度は、立場をこえて問題を把握し、次に、問題を解決する理論上の必要において立場をつくるという順序をすすめた。このことは、戸坂が立場の意味をみとめず、立場をこえた超党派的な真理探求の方法をすすめたことを意味しない。戸坂は、「科学の歴史的社会的制約」において、数学ならびに自然科学さえも、問題の発見と理論発展の手續きにおいて、歴史的社会的制約のもとにあることをのべ、階級性の影響下にあることをのべる。しかし、数学および自然科学は、それらが、歴史的現段階に立脚しないという方法上の約束をもつゆえに、理論の形態については、歴史的社会的な制約を受けないことをみとめた。社会科学や哲学、さらに日常的問題の思索において、人間は、歴史的現段階に立脚して問題をたて、問題解決のための理論をつくる必要にせまられる。とくに、数学や物理学からもっとも速い方法上のモデルとして日常的問題の理論を考える時、戸坂は、そこで活用される性格的概念に注目する。

性格とは、事物の支配的な性質である。日常の事物のどの性質が性格としてあらわれるかは、それについて考える人が、どのような仕方でその事物にむかおうとするにかかわる。性格の発見にさいしては、どんな方法もいちはゆるされる。しかし、それが真であるかどうかは、やがて、それにもとづいてつくられた実践計画によって、審判される。その審判の標準をあたるものは、歴史的運動である。

事物の性格は常に歴史的全体の歴史的運動に寄与しなければならない。この寄与をなし得る時、性格は性格であり、この寄与をなし得ない時、性格ではなかったのである。前の場合に於て性格は正しく把握され、後の場合に於てはそれは誤まって把握される。「性格」概念の理論的使命

戸坂潤は、日常的問題の理論を、重要なものと考えた。形式論理学は、数学や物理学のように、超歴史的な理論としてみずからを提示しようとする。形式論理学は、このために当然に、非性格的な理論の形をとる。このような論理学を、戸坂は、今日の日常の問題についてわれわれが議論することに役だてる仕方では、拡張しなければならぬと考えた。このように拡張された時、形式論理学は、形式論理学でなくなる（と私には思える）。同時に、それは、性格的な理論をもつことになる。そのような理論にとって重要なのは、真理から真理にむかって推論する方法ではなくして、われわれの思想の中にしのびこんでくる虚偽をいかに見わけるかという問題である。

恐らく吾々は性格的な論理法則を必要とするであろう。処が恰も吾々にとって最も興味あるものは形式論理学に於ける虚偽論でなければならぬ。（「性格」概念の理論的使命）

虚偽は真理よりも性格的でありやすい性質をもっていると、戸坂は考えた。この主張の延長線上に、戸坂は、同時代の言論を素材とする性格的論理学を設計した。

戸坂潤の『イデオロギー概論』は、このような性格的論理学の青写真であり、その『日本イデオロギー論』は、その青写真にもとづいてきずかれた一つの建物である。だからこそここには、十年來の地ならしと土台設計の上にきずかれた堅固な家がある。

戸坂潤の『日本イデオロギー論』の初版が発行されたのは一九三五年である。その批判の主な対象は、一九三一年の満洲事変以後に、自由主義から日本主義にむかつて流れていった一つの思想的潮流だった。戸坂によれば、日本の自由主義は確固たる思想運動としての形をもたず、むしろ明治以来、主として文学をおして気分としてひろまってきた不定形の思想としての特色をもっている。ここには、日本の自由主義に特有の文学主義があり、それがドイツ流の言葉の意味の解釈をかさねて議論をすすめる、文献学主義につらなまってゆく。もともとが理論というよりも気分と呼ばれるにふさわしい不定形の思想だったので、それは理論上の党派的節操にとほしく、そのために、いったん国策が戦争のほうにきまると、日本主義にかわることに何の論理的抵抗力ももっていない。戸坂は、思索の方法としては、まず党派性をこえて問題に出会うことをすすめるが、いったん問題がとらえられてそれについての理論がつくられたなら、その理論はかならずある種の党派的節操を、結果として要求すると考える。思想のいかなる段階においても、無党派を主張する考え方となる。ところが、確固とした理論の形をとり得ない、文学主義的・文献学主義的な自由主義思想は、まさにその不定形の論理構造のゆえに、やすやすと、日本主義の方向にいかなる歯どめもなく流れてゆく。

大正期の自由主義哲学者和辻哲郎が、「倫理」とか「人間」とかの日本語の語源にさかのぼってこれらの言葉の語感の中にひそむ智慧をはりだして見せる時、読者は啓発されることもあるが、それらの言葉の語感の分析は、そのまま、それらの言葉のさししめす事物関係そのものの分析としては、受けとることができない。「倫理」という言葉の語感の分析は、倫理というCの分析では、ないのだ。さらに不思議なことに、和辻の哲学において、日本語の言いあらわすことは、たいていが最高の真理なのだ。そう結論できることの論理学的保証はないはずだと、戸坂は批判する。

このあたりに、和辻流の日本主義思想のおとしあながある。

戸坂の批評は、腕力にまかせたごういんな批評ではない。ひとりひとりの日本主義思想家の論文をくわしく読んで、それぞれ論文の性格に密着した批判をくわえている。権藤成卿の『自治民範』について、民衆の衣食住の制度をよりよいものにしてゆく民衆自身の自治能力の向上をすすめる思想であるとして、明治維新以後の日本政府の官僚専制を批判するその性格を見わけている。にもかかわらず、この思想はひとたび日本精神主義という潮流の中におかれると、その著者の意図をこえて、日本政府の国策擁護の道具として用いられることをまぬかれないうであろうと言う。

戸坂の日本主義批判は、満洲事変から盧溝橋事件にかけて日中戦争の初期の段階における日本の論壇の変化にたいする適切な批評だった。この時代には、革新政党の権威によりかかって議論をすすめることは不可能であり、戸坂のように、いったん党派性をこえて論理学的規範によって批判をこころみという一昔前までは教室スタイルと見なされた論法が、読者大衆にうったえるもつとも直接的な論法だった。このゆえに、戸坂の哲学的論作は政治的な役割をになわせられることとなり、彼の獄死の原因をつくった。

戸坂の性格的論理学は、一九三〇年代の日本で、ある種の自由主義思想がある種の日本主義思想へ移ってゆく論理的からくりをときあかす。同じからくりは、三十年後の今日、ふたたび働いている。日本思想の特色の尊重が、現在の日本政府の政策への批判の放棄と合流する危険にたいして、われわれは今も眼をさましている必要がある。戸坂の死後二十年は、日本における自由主義を思想として確立させたいと言えない。不定形自由主義から国家主義的日本主義へのけじめのない変化にたいして論理学的批判を続けて妥協することのなかった戸坂潤の活動は、日本の唯物論にとってだけでなく、日本の自由主義にとっても、すぐれた伝統の一部分である。

（鶴見俊輔「戸坂潤——獄死した哲学者」による）

注 形式論理学：推論や議論の妥当性を、内容面を捨象し、形式面に関して考究する学問。

問一 傍線部1「戸坂潤の仕事において、もっとも注目すべきものは、批評の原理の一貫性なのだ」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 戸坂潤は、強権的な政府に対抗するためには強固な公式主義が必要とされた戦時下において、同時代を官能によってとらえるという独自の批評のあり方を原理的に貫き通したから。

ロ 戸坂潤は、欧米の学問の下うけのような批評家のあり方を拒んだが、日本精神主義という流行に対しては欧米由来の自由主義思想を原理的に肯定し、自らの批評の根底におき続けたから。

ハ 戸坂潤は、軍国主義時代の政府による弾圧に容易に屈した他の批評家とは違い、特定の勢力や権威に左右されることなく、自らが最初から信じる批評の原理を変えなかったから。

ニ 戸坂潤は、同時代のさまざまな事件や人物、言論を対象に批評をくりひろげたが、その持続を可能にしたのは批評を始める前に長い時間を費やして形成した批評の原理だったから。

問二 空欄 A に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 個性 ロ 抽象 ハ 感性 ニ 特殊

問三 空欄 B に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 重大な思想は、全く新たな問題を発見しえたときにだけ、その第一歩を踏み出す。

ロ できあいの問題をつねに疑うことによって、できあいの立場は回避できる。

ハ あたえられているものを新しく見出すところから、重大な思想はつねにはじまる。

ニ 歴史によって、社会によってあたえられる問題だけが、既成の立場を正当化する。

問四 傍線部2「立場をこえた超党派的な真理探求の方法」とあるが、これとはほぼ同じ意味のことを述べている二十字以上三十字以内のひとつづきの部分を、これ以降の本文の中から探し、初めの三字と終わりの三字を、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問五 傍線部3「戸坂は、そこで活用される性格的概念に注目する」とあるが、その理由として適切でないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 性格的概念は、考える人の、その事物にむかおうとする姿勢とかかわっているから。

ロ 性格的概念は、それが真であるかどうかを判断する歴史的運動に、つねに寄与しているから。

ハ 性格的概念は、今日の日常の問題についての議論に役立つ形で、形式論理学を拡張できるから。

ニ 性格的概念は、歴史的現段階に立脚して問題をたて、問題解決のための理論をつくるうえで必要だから。

問六 傍線部4「われわれの思想の中にしのびこんでくる虚偽」とあるが、本文中に挙げられている「虚偽」の例として適切でないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 理論上の党派的節操

ロ 日本政府の国策

ハ 日本精神主義

ニ 文学主義的・文献学主義的な自由主義思想

問七 空欄 C に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 真理 ロ 曖昧さ ハ 日本語 ニ 指示物

問八 次の中から本文の論旨に合致するものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 戸坂潤が自分の思想を公式主義と批判されても動じなかったのは、立場から始まり立場を守って終わる公式主義とは違い、問題の発見の後の理論形成の途上で立場がつけられると考えていたからである。

ロ 戦後の批評家は、過去の軍国主義時代にあらゆる思想が日本主義にむかって雪崩れ込んでいったことの反省から批評をはじめたがゆえに、気分のようにひろがる不定形の日本主義に対してじつに用心深い。

ハ ある特定の立場から出発しあくまでもその立場を守り抜こうとする思想家は、新たな問題をみいだすことのない不毛にたえる一種英雄的な姿ゆえに、戦時下の希望を失った人々の心の拠りどころとなった。

ニ 明治以来、主に文学をとおしてひろまった日本の自由主義はついに不定形の論理構造しか持ちえなかったため、今後、確固とした論理構造を有する自由主義確立のためには文学主義の排除がまず求められる。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

雑誌を毎週、毎月、買い続けるのは難しい。創刊から休刊、廃刊までおつきあいする人は珍しい。読み始める時期もまちまちだが、「卒業」する時期も人によって異なるだろう。人生のなかで、数か月、数年、共に歩むということから、時の移り変わりを表す「青年」というキーワードは、雑誌というメディアの特徴をよくとらえている。

われわれが出会う雑誌は、その雑誌の長い歩みの一部にすぎない。雑誌研究は読者が知らない過去、未来を教えてください。教養主義的な香りを帯びた『人生手帖』が、食品や調理器具の通信販売を手がけるようになり、やがて『健康ファミリー』へ誌名を変えたこと、初期の『ロッキング・オン』に、本当は会っていないのに、会ったつもりになって創作した『架空インタビュー』がしばしば登場したこと、『百万人の英語』で、資格や学校での勉強とは異なる、フォーリナー・ハントやペンパルの文化が花開いていたことなど、かつて読んでいた、今、読んでいる雑誌は時代によって誌面を変化させていく。

どの瞬間であれ、雑誌との出会いには意志がある。生まれたときからそこにある新聞やテレビと異なり、自然に接触するものではない。書物ほどではないが、自ら選んだという感覚が残る。毎週、毎月、買うとなれば愛着もわく。単に読んで情報を得るというだけでなく、同じ雑誌を共有するという一体感、参加する意志、感覚、愛着こそ読者共同体を育むドジョウである。受験戦争下のライバルを意識させる『螢雪時代』、進学できない鬱屈した思いを教養主義に託す『葦』『人生手帖』、友だち感覚でスターに接する気持ちを分かち合う『ロードショー』、コスモポリタンの美徳を身につけたアマチュア無線家たることを確認する『CG hamradio』など、雑誌を通して共同体が生まれる。読者欄には参加せねばならない、脱落したくないという熱い思いがある。

ただし、それはあくまで想像の共同体である。現実の共同体は青年にとって学校にある。目の前にいる同級生こそ、直接的に関係をもつ人々だろう。雑誌によるつながりは頭の中にある。同じ雑誌を買い、読み、思いを一にする人々がほかにもいるという期待が読者共同体を支えている。雑誌は現実存在する学校とは別のオルタナティブな場を提供できる。

ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』によれば、出版物が広く流通するようになり、多くの読者を得るようになると、口語の多様性が一つに収斂して、同じ言語が通用する範囲に国民意識が形成されたという。ただし、それは偶然な宿命のように感じさせる魔術的な要素を含んでいた。新聞やテレビが自然なものととらえられ、学校というシステムには当然通わねばならないとすれば、もたらされる共同体もまた、自らが選んだ、生み出したという自覚をとまわらない定めとなろう。

雑誌は教科書のように学校で配られたりしない。手に取るという行為に、程度の差はあれ、意志を感じる。しかし、商業誌の受け手にとどまる限り、どこまでその意志に自覚的でいられるかは疑問である。送り手ともなる同人誌のほうが、『読者』共同体として意識的であり、幻覚の程度は低いのではないか。新聞のように最初からそこにある自然なメディアではなく、自分たちで決め、自分たちで選択するというのなら、雑誌は読むべきものであるとともに、作るべきものである。

商業誌を媒介とする読者共同体は同人誌に比べ、社会に開かれている。同じ読者の存在を想像できるということが、青年から大人への道筋なのかもしれない。そのことを、自分たちのことは自分たちで決定する

Ⅰと受け止めるのか、成熟とみなすのか、意見は分かれるだろう。佐藤卓巳は雑誌メディアの特性としてのミディウムⅡ中間性を強調している。書棚にストックされる書物と毎日、読み捨てられるフローな新聞のあいだには、私的な空間と公的な空間のミディウムとしての雑誌がある。新聞が共同体を自覚できないのは一般化されているためである。情報は共有され、場合によっては公衆が生み出されるのかもしれない。しかし、特定の新聞に愛着をもち、こだわりがあって、その気持ちを意識させるほど、新聞というメディアは個々に独自性をもっていない。逆に、書物が共同体を作らないのは特殊化されすぎているからだろう。教養主義は唯一、書物による読者共同体を可能ならしめてきたが、それも過去のものとなって久しい。

Ⅱそして、今は青年と雑誌の黄金時代でもない。青年期はいまになり「若さ」のみが強調され、雑誌の凋落は目に見えて顕著であり、通勤電車で人々が手に取るものは雑誌ではなくスマートフォンである。すなわちインターネットが雑誌の領分を浸食している。インターネットの特性には「Ⅱ」ということがある。ネット上の掲示板はだれが読むか予測できない。だから、雑誌の読者欄で共同体に向けて意見を表明できた時代は幸せである。マスメディアの「マス (Mass)」は「多数」「多量」という意味をもつ。究極には不特定多数を想定している。新聞やテレビはその代表だろう。インターネットにはこうしたフローで、不特定多数に向けた情報発信が含まれる。

Ⅲ一方で、SNSなど仲間内でコミュニケーションをとるのに適した親密なネット空間も存在する。掲示板はどうだろうか。閉じられたものもあれば、2ちゃんねるのように開かれたものもある。では、ネット上のなかが中間的なものにあてはまるのだろうか。自分たちだけの近しいつながりと、マスに公開される情報群のあいだに、私的なものから公的なものへいたるミディウムをインターネットは提供できるのだろうか。

Ⅳ情報だけでなくネット上の同人ページ、同人掲示板、同人SNSでよいではないか。なぜあえて雑誌を作るのだろうか。当然のことながら、インターネットはモノによって象徴されないつながりである。隣の読者を想像させる物体がない。意識は常に目の前のページを作った人、意見を書き込んだ人に集中する。反対に、モノとしての同人誌が「いま・ここ」で直接的に人々をつなげているわけではない。同じ印刷物を手に取る人々がいるということ想像させる余地をもつ。

Ⅴ人々を直接的な世界で結びつけるのではなく、見知らぬ存在とも共有させるためには想像という媒介を必要とする。しかも、自然なものとしてではなく作爲的なものとしてそれをクドウさせるにはどうすればよいか。そこにⅢとして位置づけられる雑誌メディアの重要性がある。自覚のある想像の共同体という点で、雑誌の可能性はインターネットに対し失われないうに思う。

問九 次の一文が入る最も適切な箇所を、本文の空欄 イ ホ の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

読者は青春という限られた機会に、ほんの一瞬、それに触れるだけなので、過去から未来まで、その雑誌の全貌を知らされたとき、とても驚かされるのである。

問十 傍線部 A「時の移り変わりを表す「青年」というキーワードは、雑誌というメディアの特徴をよくとらえている」とあるが、その「特徴」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 私的関係に止まらず広く社会を意識するようになるという特徴
- ロ 人生の中で学生時代のある一時期だけ関わりを持つという特徴
- ハ 大人には理解できない若者独自の価値観を体現するという特徴
- ニ 若者が公的な社会に参加する教養を培う機能を持つという特徴

問十一 傍線部 B「偶然を宿命のように感じさせる魔術的な要素」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 自分自身が望んだ選択であったにもかかわらず、強いられたいものと感じられるようになるということ。
- ロ 思いがけない人生を強制されたにもかかわらず、自らの運命として積極的に受けとめるようになるということ。
- ハ 意識的に作られた制度の起源が忘れられ、初めから存在していたかのように錯覚されるということ。
- ニ 偶発的な自然の力によって、多くの可能性が失われてしまったことを甘受すること。

問十二 空欄 I に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 共同体の喪失 ロ 自主性の欠落 ハ 商業性の優位 ニ 社会的な秩序

問十三 空欄 II に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 多数の代表者の意志
- ロ 不確実な通信の方法
- ハ 予測不能な情報発信
- ニ 明確な受信者の不在

問十四 傍線部 C「商業誌を媒介とする読者共同体は同人誌に比べ、社会に開かれている」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 同人誌というのは、実体のある顔見知りの狭い範囲の読者から成り立っているのに対して、商業誌は広い社会の中で、お互いに顔も名前も知らない大勢の読者によって構成されているということ。
- ロ 同人誌の読者が、自分たちの殻の中に閉じこもっている未成熟な青年たちであるのに対して、商業誌の読者は雑誌を購入するという経済的行為を通して、社会に参入している大人たちであるということ。
- ハ 同人誌の読者には、自分たちの雑誌だけが絶対的な価値をもつ存在であるのに対して、商業誌の読者は多くの雑誌を読み比べながら、その雑誌に社会的に公平な評価を下すことができるということ。
- ニ 同人誌の場合には、作り手と受け手の区別が曖昧で役割意識が希薄であるのに対して、商業誌の場合は編集者と読者との区別が明瞭で、社会的な役割分担と分業体制が確立されているということ。

問十五 空欄 III に入る最も適切な三字の語句を本文の中から抜き出して、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問十六 次の中から本文の論旨に合致するものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ インターネット社会が自明な現在の若者たちにとって、かつて黄金時代を誇った雑誌はもはや過去のものであり、これに変わる新しいメディアの到来が待望される。
- ロ 定期刊行物である雑誌は、長期間にわたって読み継がれることが多いことから、老若男女にかかわらず、不特定多数の読者に愛読される普遍的なメディアであり続ける。
- ハ 定期刊行物としての雑誌が廃刊することは避けがたい現実であるので、今後はインターネットによって形作られる共同体をいかに発展させていくかが重要となる。
- ニ インターネット社会が中心となった現在でも、見知らぬ不特定多数の読者たちを結びつける想像的な空間をつくりだすことができれば、雑誌の存在感は維持されるであろう。

問十七 傍線部 1・2 のカタカナの部分の漢字に直し、記述解答用紙の所定の欄に記せ（漢字は楷書で丁寧を書くこと）。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。文章中の「朝成の中納言」と「一条摂政」は、この二人がのちに
ついた官職による呼称であり、この文章に述べられている時点での官職ではない。

皆人知ろしめしたることなれど、朝成の中納言と一条摂政と同じ折の殿上人にて、品のほどこそ一条殿に等しからねど、身の才、人おぼえ、**A** 人なりければ、頭になるべき次第、いたりたるに、またこの一条殿、さらなり、道理の人にておはしけるを、この朝成の君 申したまひけるやう、「殿はならせたまはずとも人わろく思ひ申すべきにあらず。後々にも御心にまかせさせたまへり。おのれはこのたび、まかりはづれなば、いみじう辛かるべきことにてなむ侍るべきを、このたび、申させたまはで侍りなむや」と申したまひければ、「ここにもし思ふことなり。**甲**」とのたまふを、いと **B** と思はれけるに、いかにおぼしなりにけることにか、やがて問ひごともなく、なりたまひにければ、「かくはかりたまふべしやは」と、いみじう心やましと思ひ申されけるに、御なかよからぬやうにて過ぎたまふほどに、この一条殿のつかまつり人とかやのためにも、なめきこと、^②したうびたりけるを、「**C**」などばかりは思ふとも、いかに、ことにふれて我などをば、かくなめげにもてなすぞ」と、^③むつかりたまふと聞きて、「あやまたぬよしも申さむ」とて、参られたりけるに、早うの人は、我より高き所にまうでは、「こなたへ」となきかぎりは、上にもものぼらで、下に立てることになむありけるを、これは六七月のいと暑くたへがたき頃、かくと申させて、今や今やと中門に立ちて待つほどに、西日もさしかかりて、暑く、たへがたしとはおろかなり。心地もそこなはれぬべきに、「早う、この殿は、我をあぶり殺さむとおぼすにこそありけれ。益なくも参りにけるかな」と思ふに、すべて悪心おこるとは、おろかなり。夜になるほどに、さてあるべきならねば、笏をおさへて立ちければ、はたと折れけるは、^④いかばかりの心をおこされにけるにか。さて家に帰りて、「この族、ながく絶たむ。もし男子も女子もありとも、**D** てはあらせじ。あはれといふ人もあらば、それをも恨みむ」など誓ひて、うせたまひにければ、代々の御悪霊とこそはなりたまひたれ。

(「大鏡」による)

注 朝成の中納言：藤原朝成。

一条摂政：藤原伊尹。

はたらと：笏が折れる音。

問十八 空欄 **A** **B** **C** **D** に入る最も適切なものを、それぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ

(空欄には適切に活用させた形が入るものとする。同じ記号を一度以上用いてはならない。)

イ うれし □ はかばかし ハ はいなし ニ やんことなし

問十九 傍線部 ①「この一条殿、さらなり、道理の人にておはしけるを」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、

解答欄にマークせよ。

イ この一条殿も、一層、道理を重んじる人でいらつしやつたが、

□ この一条殿も、勿論、道理をわきまえた人でいらつしやつたが、

ハ この一条殿も、勿論、その官職につくべき人でいらつしやつたが、

ニ この一条殿も、当然、その官職につくものと思われていらつしやつたが、

ホ この一条殿も、当然、その官職につくことを希望していらつしやつたが、

問二十 傍線部 ①④の動作や状態の主体をイ「藤原朝成」、□「藤原伊尹」、ハ「イ・□以外の人物」に分類するとき、それ

ぞれ、どれに該当するかをイ・ハの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

問二十一 傍線部 a・e をイ「尊敬語」、□「謙譲語」、ハ「丁寧語」、ニ「イ・□・ハのいずれでもないもの」に分類すると

き、それぞれ、どれに該当するかをイ・ニの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

問二十二 空欄 **甲** に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ さらば申さじ

□ さらば申さむ

ハ さらば申さまほし

ニ されど申したまへ

ホ されど申すべし

ハ されど申すまじ

問二十三 傍線部2「かくはかりたまふべしやは」と、いみじう心やましと思ひ申されけるに」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ こんなふうにならば邪推されていたのかと、ひどく無念に思っ
ロ こんなふうにならばくだらないうちのかと、ひどく苦々しく思っ
ハ こんなふうにならば相談しなければよかったと、ひどく後悔をし
ニ こんなふうにならばだまされてよいものかと、ひどくいまいしく思っ
ホ こんなふうにとりかたはからつてくれたのかと、ひどく申し訳なく思っ

問二十四 傍線部3「いかばかりの心」の内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 不興をこうむり一族の将来に絶望する気持ち。
ロ 我慢を続けたのも徒労であつたと落胆する気持ち。
ハ 無礼な仕打ちを受けたことに対する恨みの気持ち。
ニ このような事態を招いた従者に対する怒りの気持ち。
ホ どのような慰藉も受け入れまいとする反発の気持ち。

問二十五 『大鏡』よりも前に成立した作品の中から三つを選び、解答欄にマークせよ。

- イ 伊勢物語 ロ 懷風藻 ハ 古今著聞集
ニ 新古今和歌集 ホ 土佐日記 ヘ 平家物語

(四) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ（返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

孔子^{ナレバ}謂^{ヒテ}子路^ニ曰^{ハク}、「君子^{ニシテ}而強^{ナレバ}氣^チ、則^チ不^レ得^ニ其^ノ死^ヲ。小人^{ニシテ}而強^{ナレバ}氣^チ、則^チ刑^{ケル}戮^シ。罔^ミ詩^ニ曰^{ハク}、『殆^{オホシ}天^ノ之未^ダ陰^ニ雨^セ、微^ヒ彼^ノ桑^ノ土^ヲ、綱^{コウ}繆^{ミウ}。今^{イマ}汝^ラ下^ニ民^ヲ、或^ア敢^テ侮^ル余^ヲ。』孔子^{ハク}曰^{ハク}、『能^ク治^ム國^ノ家^ヲ之^ノ如^ク此^ノ、雖^モ欲^ス侮^{ラント}之^ヲ、**A**可^ク得^ル乎^ヲ。周^ハ自^リ后^ノ稷^ヲ、積^ミ行^ハ累^ニ功^ヲ、以^テ有^ニ爵^ヲ土^ヲ、公^ヲ劉^ス重^ニ之^ヲ、以^テ仁^ヲ。及^ビ至^ニ大^ニ王^ニ、宣^ハ甫^ヲ敦^ニ以^テ德^ヲ、讓^リ其^ノ樹^ノ根^ヲ、置^キ本^ヲ、備^ヘ予^メ遠^ニ矣^ヲ。初^メ、大^ニ王^ニ都^シ幽^ニ、翟^ニ人^ヲ侵^ス之^ヲ、事^ヲ之^ヲ以^テ皮^ヲ幣^ヲ、不^レ得^ル免^ル焉^ヲ。事^ヲ之^ヲ以^テ珠^ヲ玉^ヲ、不^レ得^ル免^ル焉^ヲ。於^ニ是^ニ屬^ス耆^ヲ老^ヲ而告^ゲ之^ニ、『所^ハ欲^{スル}、吾^ガ土^{ナリ}地^{ナリ}。吾^レ聞^ク之^ヲ、君^ノ子^ノ不^レ以^テ所^ヲ養^ハ而害^ス人^ヲ。二^ニ三^ニ子^ノ何^ノ患^ニ乎^ヲ無^ク君^ヲ。』遂^ニ獨^リ与^ニ大^ニ姜^ヲ去^リ之^ヲ、踰^ニ梁^ニ山^ヲ、邑^ニ于^ニ岐^ニ山^ノ之^ノ下^ニ。幽^ニ人^{ハク}曰^{ハク}、『仁^ニ人^ノ之^ノ君^{ナリ}、不^レ可^ク失^フ也^ト。』從^ニ之^ヲ如^ク歸^ス市^ニ焉^ヲ。天^ノ之^ノ与^シ周^ニ、民^ノ之^ノ去^ル殷^ヲ、久^シ矣^ヲ。若^シ此^ノ而^レ不^レ能^ク天^ノ下^ヲ、未^ダ之^ノ有^ラ也^ヲ。武^ノ庚^ノ焉^ヲ能^ク侮^{ラン}。詩^ニ曰^{ハク}、『執^ニ轡^ヲ如^ク組^ノ、兩^ノ驂^ニ如^ク儔^ノ。』孔^{ハク}子^{ハク}曰^{ハク}、『為^ニ此^ノ詩^ヲ者^ハ、其^レ知^ル政^ヲ乎^ヲ。夫^レ為^ル組^ヲ者^ハ、綫^ニ紕^ヲ於^ニ此^ニ、成^ニ文^ヲ於^ニ彼^ニ。言^フ其^ノ動^キ於^ニ近^ニ行^中於^ニ遠^ニ也^ヲ。執^ニ此^ノ法^ヲ以^テ御^{セバ}民^ヲ、豈^ニ不^レ化^セ乎^ト。』

（『孔子家語』『好生』による）

注 幽：地名。

微彼桑土、綱繆庸戸：親鳥が桑の根の皮を剥ぎ取って巢穴を補強する。

后稷・公劉・宣甫：周王朝の始祖たち。

爵土：爵位と土地。

翟：地名。

皮幣：毛皮や絹の贈り物。

耆老：人々の尊敬を集める老人。

大姜：宣甫の妻。

武庚：殷の最後の王となった紂王の子。

組：美しく編んだ組みひも。

兩驂：四頭立ての馬車の外側の二頭の馬。

紕：組む前の一本ずつのひも。

問二十六

空欄 **A** に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 遂 口 将 ハ 豈 ニ 必 ホ 故 ヘ 未

問二十七

傍線部 1 「所養」とは、具体的には本文中の何を指すか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 下民 口 国家 ハ 敵人 ニ 皮幣 ホ 珠玉 ヘ 土地

問二十八

傍線部 2 「何患乎無君」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 人を導く君主がいけないことだけが心配なのではない。

ロ 人を導く君主を亡き者にする動きがあるのが心配だ。

ハ 人を導く君主がいけないこと以上に心配なことではない。

ニ 人を導く君主がいけないことを心配する必要などない。

ホ 人を導く君主がいけないことを心配しない人はいない。

ヘ 人を導く君主が何の心配があつて領地を離れるのか。

問二十九

この文章では、国を統治するにはどのようなやり方が良いと述べているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 君主は金銀財宝を蓄えるだけでなく、民が安住する土地を確保する。

ロ 君主は先々のことを思い図って備えをし、仁徳をもって民に接する。

ハ 君主は民に自然と慕われるために、仁徳をもって民の声を聞き入れる。

ニ 君主は馬を御すように民を治め、組みひもを組むように法の網を作る。

ホ 君主は民の心を自然とつかみ、操られていると気付かせないようにする。

ヘ 君主は自国の民には仁徳をもって接し、国を侵す者は断固として退ける。

〔以下 余白〕

